

第1回いじめ問題対策連絡協議会で得られた主な意見

これからの検討内容

プログラムの
有用性

共通理解

- プログラムは常に学校で共通理解するために必要である。
- 私立学校にとって、いじめ予防等の取組をパッケージ化し、各学校が活用できることは、いじめ予防について同じ方向性を持つために重要である。

拡張性

- プログラムを教員だけが使うのはもったいない。関係機関でもプログラムを使い、取組を行うことができるか。

いじめの発見・
対応が困難な要因

いじめを認知する
アンテナの弱さ

- いじめに対して教員の思い過ごしや危機感のなさがある。
- いじめを認知する感度をもっと上げる必要がある。

学校内外の
組織的対応の弱さ

- いじめや保護者の対応に教員が萎縮している。
- 学校はチームでいじめへの対応を行うという意識の切り替えができていないか疑問を感じる。
- 学校外で起こったいじめの対応が難しい。
- 教員だけに任せず、保護者も真剣に考えなければならない。
- 若い教員が保護者とうまく関係を作り、早期発見につなげるような教員を支える仕組みや研修が必要。
- チームとして先輩が後輩をバックアップすることができればよい。

安心できる関係性

- 子どもは親や大人に駄目な自分を見せたくないから気持ちを言えない。子どもたちが安心して言えるような人間関係づくりが必要。

プログラム作成内容

予防・未然防止

- いじめの予防・未然防止に力点を置いて取組を進めれば、子どもは救われる。
- 予防・未然防止は大事なテーマだ。
- いじめを生まない取組の中核となるのは授業である。授業で優しさや思いやり、人間関係を育むことが予防には有効。

特別支援教育の観点

- 特別支援教育の視点をプログラムに取り入れることは大事。
- 特別な支援が必要な子どもたちへの合理的な配慮・対応をすることが人間関係づくり、環境づくりになるのではないか。

虐待の観点

- 虐待もいじめも早く芽を摘むことが重要である。プログラムは虐待の背景も踏まえた内容でなければならない。

プログラム作成行程

高知県の実態を
反映した
プログラムづくり

- 教員の意見がプログラム作成に反映されるとよい。いじめをどうして見つけることが難しいのか、何に困っているか聞いてみたらよい。
- 子どもの意見も踏まえ、実態に応じた内容を入れるべき。
- 子どもが知っている情報を教員がどうやって吸い上げるか。

作成行程

- 提案の項目でまとめていき、必要なことがあれば、付け加えたらどうか。
- 研究指定校を決めてプログラムづくりをしてはどうか。
- プログラムに「いじめ」という言葉を前面に出すのはどうか。
- いじめを生まない人間関係づくり、環境づくり、気持ちづくりはどこから始めるか順番の検討が必要。

【資料2-2】
いじめに適切に対応するために取り組むべき課題

- 学校のいじめ対応における課題
- いじめの要因や対応についての高知県の子どもや教員の声

【資料2-3】
いじめの予防や効果的な支援について研究を進めている専門機関

- BP（いじめ防止支援プロジェクト）

【資料2-4】
高知県の実態に応じたいじめ予防等プログラムの作成に向けて